

A1：那覇市内河川に設置した簡易救助器具による救助奏功事案について

発表者：○渡久地 朝康(那覇市消防局)

概要：平成26年3月に那覇市消防局の職員で構成される団体（消防職員協議会）のボランティア活動として那覇市内の河川沿い28か所に簡易救助器具（ペットボトル）を設置しました。平成27年2月、河川に転落した男性に対し、通行人（119通報者）が近くに設置された簡易救助器具を投げ、転落した男性は消防隊到着までの間、簡易救助器具につかまり無事救助された。

A2：インドネシアにおける国際学会と「ういてまで」講習会の開催結果について

発表者：○西分竜二(海上保安庁(元インドネシア JICA 専門家))

概要：第三回目になる国際学会を2014年11月末にインドネシア(ジャカルタ)にて開催した。当該分野のNPO法人等も無い当地において、相手国のカウンターパートを何処にするのか、開催場所はどこにするのか、開催までの準備と開催結果、開催後の動きなど、現地にて、受け入れを行った担当として、当時の活動状況を紹介し、今後の水難学会の国際普及活動の参考としてもらう。

A3：着衣泳講習経験の調査と「浮いて待て」の講義受講における効果の分析—

—K 大学・学生のアンケート調査より—

発表者：○宮野由紀子(小田原短期大学)

概要：発表者宮野の経験から、成人同様の大学生に浮いて待ての啓発を行うには、座学を行った方がより興味・理解・関心を持つのではないかと仮説を立てた。また、今後の指導に生かすためにアンケート調査の分析を行った。本学保育科の学生に「着衣泳講習」のアンケート(集団調査・記述式)を2回に渡り実施した。1回目は476名に対し「着衣泳経験の有無」「方法を覚えているか」「講習は必要だと思うか」「浮いて待ての講習を受けたいと思うか」等の質問。2回目は400名に対し「命を守る浮いて待て」の40分程度の講義を行い、直後アンケートを実施。1回目と2回目の浮いて待てに対する意識の変化と講義の効果について分析した。尚、1回目、2回目の調査対象者は同集団であるが、講義受講の人数の関係上76人の差を生じた。

B1：他団体との合同勉強会開催

発表者：○山岡和子、大宮正美、佐藤藍、丸山高司、河本明子、江田俊輔、山岡宏(安芸ライフセービングクラブ)
岩谷一喜(広島海上保安部)

概要：広島において着衣泳講習会を行っている他の団体(海上保安部)と「ういてまで」を共通の認識にしていくために、合同勉強会を行った。水難学会の指導員が行う実技の模擬授業を全員で体験の後、グループに分かれて学習評価や安全管理などについてのワークショップを行い、講習会を行う上での注意点などを確認しあった。

B2：消防本部としての「ういてまで」教室の取り組み

発表者：豊後高田市消防本部 指導員 徳永龍貴・都甲卓樹・小野正彦・水江通彦

概要：豊後高田市消防本部の業務の一環として、平成19年度からういてまで教室を開始し8年が経過した。現在まで市内11全小学校等、計58回、延べ人数2703名へ実施し、教室中の事故もゼロである。最初は指導員2名からスタートし、まず所属長への相談・了承を得て、要綱作成・職員への周知や教室を行い、救命講習会時や教育委員会の校長会等で広報を実施した。現在は小学校だけでなく、市内にある青少年の家や市のイベント等でも普及しており、消防本部の業務としても力を入れている。それらはいきさつ～現状、改善・課題を報告する。

B3：水難学会の広告デザインに関する考察～リーフレット作成の一例～

発表者：○小池 勝己（柏崎市消防本部）

概要：水難学会について、インターネットを利用出来ない環境でも、学会の概要及び活動が理解されるためのリーフレットを作成し、効果を解析した。対象は非会員（18歳以上の男女100人）にアンケートを実施する。結果、言葉とテキストで紹介するより、情報量は多く、視覚効果が優れていることが分かり、また、コストも低く持ちかえりが可能な紙ベースであるため、相手側の判断に自由度を与えることが可能となり、その後の展開に繋がることが示された。